

# 心の豊かさ生む”つながらり”

少子高齢社会のキーワード

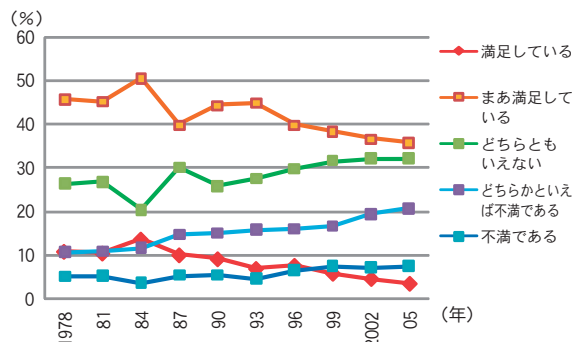


人口減少、少子高齢社会の進展、産業構造の転換など大きな潮流のなかで、私たちの身近な暮らしや生活はどのように変わっているのだろうか、またこれからどのように変わっていくのだろうか。本稿では、生活、暮らしという観点から考えてみたい。

## 経済が豊かになっても満足度は高まらない

満足度の高い生活を送りたいというのは、多くの人の望みであるが、人々は今の生活にどのくらい満足しているのだろうか。内閣府「国民生活選好度調査」(2005)<sup>1</sup>によれば、「あなたは生活全般に満足していますか。それとも不満ですか」の設問の回答者は、「満足している」(「満足している」と「まあ満足している」の合計)39.4%、そして「不満である」(「どちらかといえば不満である」と「不満である」の合計)は28.3%、「どちらともいえない」が32.1%であった。この結果を過去30年間の時系列でみると(図表1)、1984年をピークとして、生活全般につい

図表1 生活全般の満足度



資料：内閣府「国民生活選好度調査」より

て「満足している」割合は年々減少しており、それに対して、「どちらかといえば不満である」の割合は増えている、また満足とも不満とも「どちらともいえない」という割合も増えている。

戦後からの日本経済は、急速な発展・成長により1955年に一人あたりのGDPが戦前水準を超え、翌年の経済白書には「もはや戦後ではない」とうたわれた。1960年から70年の10年間のGDPは2倍を上回る水準に達し、さらに87年に一人あたりのGDPは、アメリカを抜いて世界一の経済大国となり、その後は、バブル経済、平成不況と続き日本経済は激動の時代を経て、経済的な豊さを実現してきた。国の経済が豊かになり、個人の消費額が増えれば、その分人々の満足度は高まると想像できるが、生活全般の満

1 内閣府「国民生活選好度調査」より作成。「あなたは生活全般に満足していますか。それとも不満ですか。(○は1つ)」との問に対する回答者の割合。「わからない・無回答」の割合は掲載を省略。



足度は増えてはならず、むしろ「不満である」やもしくは「どちらでもない」と感じている割合が増えている。

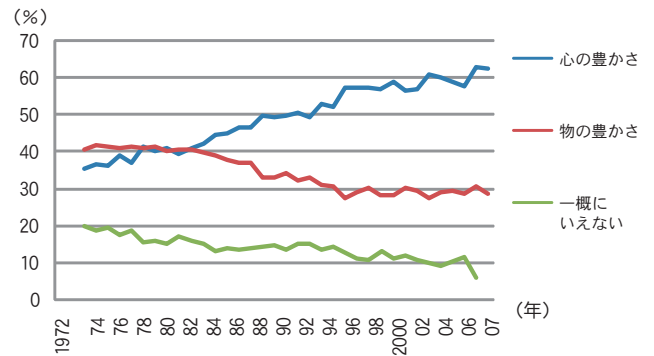
人々の満足度が高まらない理由について、経済学者の橋木俊詔らによれば、「人の満足度は期待が高ければ、それだけ達成度が低くなるため、満足度は低下する傾向がある。日本では生活水準が向上しただけに期待も高くなり、その分小さな不満が誇張されるのかもしれない。これらの事情を考慮すれば、日本人の満足度の低下は『贅沢な不満』という解釈もできる」<sup>2</sup>と、指摘している。

現在の日本の暮らしをみると、家庭ではテレビや冷蔵庫などの耐久消費財の普及が進み、スーパーではあらゆる食材や多彩な生活必需品が並び、インターネットで欲しいものをすぐに手に入れられるようになった。このようにものがあふれ、生活水準が高まり、生活の満足度を高める要素は格段に増えた。その点から満足度が高まらないのは、ものが溢れてしまったからとも解釈できるが、ものではない満足度を高める「何か」を求めているとも解釈できるのではないだろうか。

## ものの豊かさ と 心の豊かさ

内閣府の「国民生活に関する世論調査」(2007)<sup>3</sup>には「人々が望む生活」について、興味深い調査がある。今後求めるのは「ものの豊かさか、それとも心の豊かな生活か」について尋ねている。この結果では、今後の生活について求めるのは「心の豊かさ(物質的にはある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きを置きたい)」が62.6%、一方「ものの豊かさ(まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きを置きたい)」は28.6%と、心の豊かさを求める人が60%以上を占めた(図表2)。また、この結果を過去30年間の時系列でみると、1978

図表2 ものの豊かさか心の豊かさか



資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」により作成

年にはすでに「物の豊かさよりも、心の豊かさを求める」割合が逆転しており、以来、ものの豊かさよりも心の豊かさを求める割合は毎年増えていることがわかる。この結果から人々は、30年前からずっと「心の豊かさ」を求め続けているということになる。

これら2つの調査結果から30年間の人々の暮らしをみると、ものはすでに満たされ、もの変わる満足を満たすものが、心の豊かにシフトしているという方向性がうかがえる。また、このような心の豊かさを求める方向性は今後も続くものと思われる。人々が求める豊かな生活のためには何が必要だろうか。

## つながりが生み出す“豊かさ”

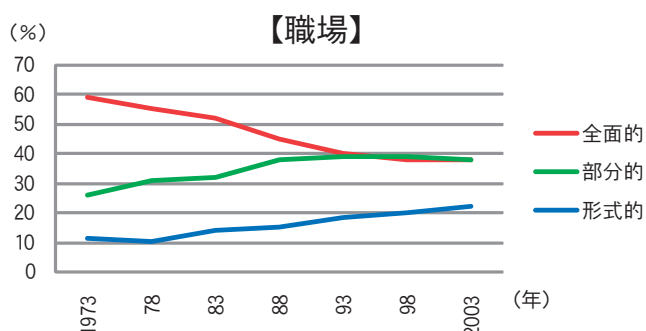
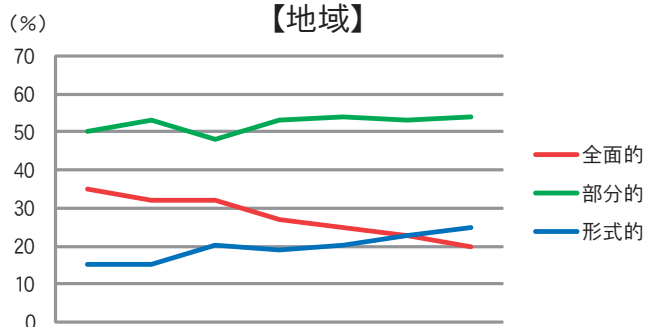
昨年発行された、2007年版の国民生活白書(以下、白書)のテーマは「つながりが築く豊かな国民生活」である。白書は、刊行から昨年で50周年を迎え、50年間にわたって、人々の生活の変貌を追ってきた。また、白書には毎年それぞれテーマがあり、このテーマをみればその時代に人々の生活について何が重視されてきたのか知ることができる。

昨年の白書では「豊かさ と つながり」の関係がテーマとして取り上げられている。そこでは心の豊かさとは「精神的な充足感や安心感」が関係し、そしてこの「充足感や安心感」は人と人とのつながりによって得ることが大きいと指摘している。白書では家族や親族など「家族のつながり」、また近隣の住民との「地域のつながり」、「職場のつながり」の3つのつながりが取り上げられている。たとえば、家族のつながりでは、「家族と一緒に過ごす時間が長い人」、地域のつながり

2 参考：橋木俊詔・本田創(2002)「豊さを測るために「根底にあるべき『豊さ』観の考察」

3 「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きを置きたい」は「心の豊かさ」とし、「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きを置きたい」は「物の豊かさ」とする。また、「どちらともいえない」は「一概に いえない」とする。「わからない」の割合は掲載省略。

図表3 望ましい付き合い方  
【地域】



資料：「国民生活白書」（2007）

では「隣近所の人と行き来する頻度の高い人」、職場のつながりでは「職場の人と行き来する頻度の高い人」ほど、生活の満足度が高い傾向があるとされている。

心の豊かさを何によって得るかは、人それぞれ違いはあるだろうが、筆者自身、家族など身近な人々とのつながりやかかわりから安らぎや安心を得ることが出来ることを日々の生活で実感している。生活にはさまざまなつながりがあるが、特に、一番身近に接する家族とのつながり、よく顔をあわせる隣近所とのつながり、職場などの長い時間一緒に過ごす人々とのつながりが多くを占めている。そのため、これら3つのつながりから、いかにして心の安らぎや充足感を得るかは、私たちの生活における心の豊かさに大きく影響しているといえる。

## つながりの現状

では、生活の満足度に関わる「つながり」が現実生活の中でどのように受け止められてきたのだろうか。まず、家族のつながりについてはどうだろう。日本人の総人口は2004年ピークに減少しているが、世帯数は増加傾向にある。予測によれば今後世帯数はさらに増

加し、2015年にピークを迎えるといわれている。このような人口減少・世帯数増加が進むことによって世帯人数が減少する世帯の「小規模化」が進むこととなる。すでに夫婦のみ世帯や、単身世帯が増えており、一世帯あたりの人員数が少なくなり、つながりを築くことそのものが難しいという現状に進みつつあることがうかがえる。

では、職場や地域でのつながりはどのように変化しているのだろうか。職場や地域での付き合い方について、過去30年間の推移をみると、図表3のような結果となっている。地域や職場においても、かつては全面的な付き合いを望ましいとする割合が多数を占めていたが、1980年代半ばころから部分的、もしくは形式的な形を望む人が多くなり、「つながり」が弱くなってきていることがうかがえる。

以上のことから、「つながりがあるほど、生活の満足度、心の豊かさが高くなる」が、現実の世界ではそのつながりが次第に希薄になってきているということが見えてくる。

## “家族や地域のきずなに関する調査”から東北を見る

東北地域では家族や地域のきずな（つながり）という点で、どのような特色あるのだろうか。内閣府「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」（平成18年度）から東北の特色の一端をみてみたい。

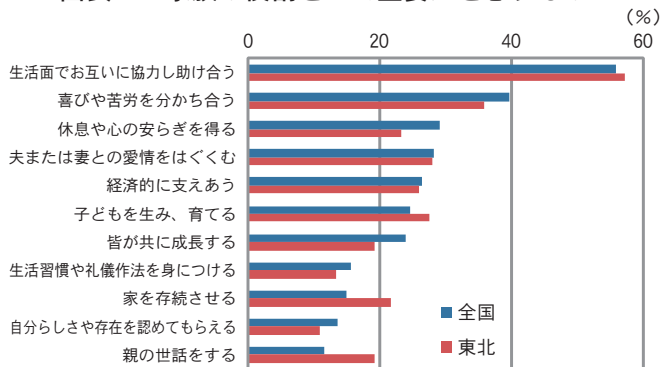
「家族の役割として重要だと思うもの」に関する結果（図表4）を東北と全国で比べると「子供を産み育てる」、「家を存続させる」、「親の世話をする」などの項目で東北の割合が高くなっている。ここに東北の特徴的なものの考え方や生活が表れているのではないか。端的に言ってしまうと、家系やその存続を大事にし、親・子・孫の関係を重視する伝統的な生活感覚が強く出ているといえる。東北地域は概して三世代同居率が高いことも、こうした背景によるものと考えられる。

図表5は、「参加している地域の子育て活動」について、全国と東北とで比較している図表であるが、すべての活動項目において、東北の参加割合は、全国よりも高く、ここから地域における子育て施策に、積極的に取り組もうという意識が読み取れる。最近では具





図表4 家族の役割として重要だと思うもの



資料：内閣府「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」(2007)より作成

体的な地域での子育て支援の取り組みとして、NPOによる「子育てサークル」の活動、シルバー人材のスタッフによる地域公民館での「子育てサロン」開催、あるいは地域の祖父母世代が若い母親とその子供との交流の場を設ける活動なども登場している。この場合、子育てというジャンルに限ったものであるが、一般論としても社会的責任として必要な地域活動への参加意識は高いといえる。

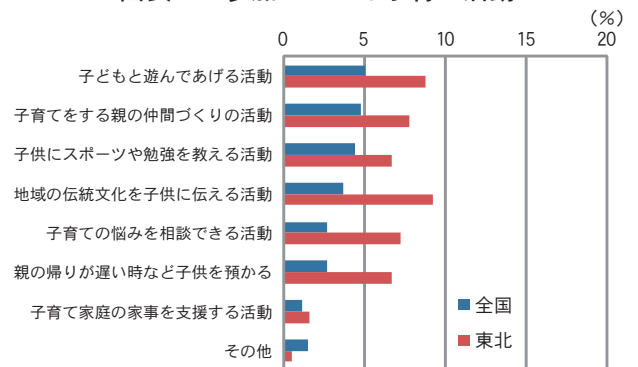
### 少子高齢社会での豊かな生活のために

少子高齢社会が急速に進み、国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、東北地域の人口は今後急速に減少し、2035年までの30年間で220万人減少(減少率22.9%)すると予測されている。

すでに仙台都市圏など一部を除いて、全般的に人口減少期に入り、東北地域の多くの場所では高齢単身世帯が急増するなど、社会的問題に進展している。少子高齢社会に的確に対応していくことのできる社会システム、地域社会のあり方、生活のスタイルをつくることが求められている。その1つのキーワードが「つながり」になると考える。

しかし、先に見てきたように社会全体においては、家族の小規模化や、職場や地域における付き合いが部分的また形式的に進むなど、つながりを求めるよりもむしろ個人化を求める傾向が進み、人と人との付き合い方も希薄化している。また、人と人とのつながりにおいては、「面倒くさい」や「わずらわしい」という側面があることも否めない。

図表5 参加している子育て活動



資料：内閣府「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」(2007)より作成

それゆえ、地域や職場でのつながりが部分的ないし形式的になりつつあるのだろう。しかし、そうであっても人と人がつながりを持ち、そしてそのつながりを育ていく過程の中でこそ「充足感や安心感」という心の豊かさ、すなわち、ものの豊かさによっては満たされない「満足感」を見出すことができるのではないだろうか。

幸いにして、東北では先に見てきたようにつながりを大事にする気風や生活実態が色濃く残されている。とすれば、このつながりを将来の豊かな社会づくりへの資質、資源として具体的な活動やシステムに生かしていくことで、やがて訪れる次のステップにつなげていくことができるだろう。したがって少子高齢社会では、この「つながり」をキーワードにして、新しいコミュニティの姿、社会や生活環境のあり方をみていくことが求められている。



家族から家族へ～受け継がれる命のつながり